

# 二〇二〇年度・学力検査問題【国語】

(高校第一回)

## 注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は14ページで□・□・□の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

—

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夏の初めになると、道路脇の小さな崖に繁茂したマメ科の植物、そこに乗っていたマメコガネを思い出します。学生時代の通学路、職場に通った道と、場所は様々なのですが、いつも夏の崖は、縦横無尽に蔓を広げ、大きな分厚い、野生のマメ類に特徴的な緑の葉に覆われていました。そういった葉を見つけると、必ず葉の端や、蔓上の小さな芽などに、マメコガネを探したものでした。

マメコガネは、光沢のある茶色の背中（羽）が、やはりメタリックの緑色に縁取られた、大人の爪ほどのコガネムシです。何より魅力的なのはそのポーズで、前から三対目の脚は、大きく上に持ち上げられ、横にまっすぐ突き出されたりしているのです。前二対の脚で、葉や、他のマメコガネの背中にしがみつきなながら、後ろの脚はしっかりと、華麗なポーズをキメている。

マメコガネは出初式をやっているに違いありません。江戸の火消しは、いなせさと度胸を示すパフォーマンス、それに訓練を兼ね備えた形で、出初式をやっていたのでしょう。何よりそれは人に見せるものだったはず。マメコガネの出初式は、誰も見るものがない。抜けるような青空のもと、暴力的な緑の繁茂の上で、誰に見せるでもなく、いつまでもじまんのポーズをキメ続けている。いや私だけが、それをじっと見ていたのです。出初式を真似するマメコガネ、だからそれはいつも、マメコガネだったのです。

さて、世界に対する対処の仕方は、三つに大別されるでしょう。人工知能の対処の仕方、自然知能の対処の仕方、天然知能の対処の仕方です。これを、身近な虫や魚に対する向き合い方において考えてみます。

第一に、人工知能です。食べるためとか、害虫として駆除するとか、自分にとつての用途、評価が明確に規定され、その上で対処するという向き合い方が、人工知能の対処に相当します。それは一昔前の日本ではよく見られた風景の一部であり、むしろ動物的な気さえして、未来的な人工知能とはソリが合わないようにも思えます。しかし私はこれを、人工知能の思考様式に対応させたいと思います。なぜならそれは、自分にとつて有益か有害かを決め、その評価のみで自分の世界に帰属させるか（食べて取り込む、益虫として利用するか）、有害なものとして排除するか（有毒なものを無視する、害虫として駆除するか）、いずれかに決め、自分にとつての世界を広げるものだからです。

第二に、自然知能です。ここでは、自然科学が規定する知能という意味で、自然知能という言葉を使います。自然知能という言葉は、様々ありますが、本書で言う自然知能とは、自然科学的思考一般の事です。昆虫少年の思考様式が、自然知能の対処のてんけいとなり、自然知能に従う昆虫少年は、世界を理解するために、博物学的、分類学的興味から虫や魚に対処していきます。学名は無理としても、正式な和名を覚え、捕虫網を持って昆虫採集し、毒瓶で虫を殺して標本作る。こうして世界に対する知識を蓄積していく。これが自然知能です。

第三に天然知能です。第一の人工知能が「自分にとつての」知識世界を構築する対処、第二の自然知能が「世界にとつての」知識世界を構築する対処であったのに対し、天然知能はただ世界を、受け容れるだけです。誰にとつてのものでもなく、知識ですらない。或る場合には評価をすることがあっても、別の場合には一切無意味であるものも受け容れる。評価<sup>③</sup>が定まっておらず、場当たりの恣意的<sup>※</sup>で、その都度知覚したり、知覚しなかつたり。これが天然知能です。

<sup>2</sup> 子供の頃、ドブ川でナマズを捕っていた私は、天然知能でした。近所には里山が広がり、草深い土手に区切られた用水路で、フナやドジョウを捕っていた私は、食べるためでも、博物学的興味からでもなく、ただ魚を捕り、しばらく飼つては、近くの沼に逃しに行っていました。その地方では梅雨の終わりに大雨が降り、近隣の沼に棲息する大型のナマズ、ライギョ、五十センチにはなるだろう、コイが、近所の、江戸時代に作られた堀に流されてきました。

大雨の翌日は決まって快晴で、水の引いた堀の淀みに、ナマズやコイが、背びれを見せながら潜んでいました、それを小さなタモ網で掬い上げることの無上の喜び。堀の上から冷やかす大人の声も気にせず、当時は自転車さえ捨てられていた堀の中で、ただ魚を捕り続けました。帰宅するとタライに魚を放し、その背中をひたすら眺めました。

自然知能は、博物学的に魚を同定しようとしませんが、ナマズやコイのイメージは常に図鑑に示されたような、横から見たイメージになります。人工知能では、自らの経験が作り出した用途でイメージが決まります。食べ物として利用するとき、ナマズやコイは三枚おろしや

切り身であり、インテリアとして利用されるときには、水槽<sup>すいじょう</sup>の中で水草と一体になったイメージとなり、その都度、それ以上でもそれ以下でもないイメージが確定します。

天然知能が見るナマズやコイのイメージは、水面から見る影であり背中です。それは常に上から見た黒々とした流線型で、奥の暗がりからフツと現れ、また奥へと消えて行つては、天然知能を興奮させます。天然知能は、自分には見えない暗がり、どうなっているのかわかるはずもない向こう側からやってくるもの、向こう側へ行くものに興奮するのです。魚が向こう側との接点であるとき、自然の中で生きている姿を見るしかない。すなわち、私たちは、水中の魚を、上から見ることができないのです。

向こう側は、他人に聞いても誰にもわかりません。客観的に意味のないものです。だから自然知能は無視します。自然知能は、問題や謎として知覚されたものだけに興奮するのです。人工知能は、知覚できたデータだけを問題にしますから、まずはデータを見せてくれ、と言うでしょう。見えないものに興奮するのは、天然知能だけの特権なのです。

マメコガネに対して三つの知能はどう反応するでしょうか。人工知能は、この甲虫がマメやブドウに対する害虫となり得るものの、日本では海外ほど暴走しない、だから自分の畑もさほど荒らさない、その程度の害虫と判断するでしょう。もちろん、それは一つの人工知能の判断で、別の経験を持った人工知能は、別の判断をするはずで、色の綺麗なものは何でも収集する人工知能なら、マメコガネの羽を自分

のコレクションに収めるべき、と判断するでしょう。人工知能に共通するのは、自らの経験によって鍛えあげられた一元的価値観で、全ての知覚されたものを評価するという点です。それは一般的には、自らにとって有益か有害か、という判断に帰着すると考えていいでしょう。

自然知能は、目の前の甲虫がマメコガネであることの確認に躍起になるでしょう。腹部を覆う羽は茶色でメタリックグリーンに縁取られています。頭部と胸部も緑色。腹は焦げ茶色ですが白い毛がたくさん生えています。こういった分類上の基準を満たすか否かで、マメコガネか否か判定されます。目の前の甲虫がマメコガネであったならば、世界に関する知識は再確認されますが、そうでない場合、新種の可能性さえ出てくる。こうしてマメコガネは、世界にとっての知識に寄与する材料となるのです。

天然知能は、目の前の甲虫を見て、知識としてマメコガネかもしれないと思いつながら、マメコガネが、自分の知らないところからやってきた点に興奮します。マメコガネは、自分の知らないことを担いできたとに違いない。出初式もその一つです。天然知能は、マメコガネと自分の出会いの中に、自分の知らない向こう側から、何かがやってくることを感じるのです。

世界の真理としての自然知能、個の経験に依拠した素早い判断である人工知能。これらに対して、天然知能には、「てんねん」という音の感じからも、論理的ではない、愚直な感じがありますが、しかし同時に、底抜けに明るい、楽天的な、生きることへの無条件な肯定が感じられます。論理的に評価し、判断する能力としては、低いかもしれ

ない。しかし本書では、天然知能だけが、自分で見ることでできない向こう側、徹底した自分にとっての外側、を受け容れる知性であり、創造を楽しむことができる知性である、ということを示していきます。結果、天然知能は、自分が自分らしくあることを、肯定できる、唯一の知性なのです。

人工知能や自然知能には創造性がなく、天然知能だけが創造性を持つのです。なぜそう言えるのでしょうか。人工知能や自然知能は、知覚したものだけを自分の世界に取り込み、知覚できないものの存在を許容できません。そこには外部を取り込み、世界を刷新する能力がないのです。天然知能は、知覚できないものの存在を感じ、それを取り込もうと待ち構えている。この意味で天然知能は、自らの世界の成立基盤を変えてしまうのです。

人工知能と人間に、何か題材を決めて絵画を制作させ、一般にアンケートを取ってどちらがいいか選んでもらう。このようにして、創造性を評価しようものなら、人工知能はたちどころに、一般の人がいいと感じる絵画の傾向を学習し、それをもって、アンケート調査で勝つ限りでの、人間が描いたよりずっと「創造的な」絵画を描けるでしょう。優劣は、優劣の基準を決めない限り、存在しないのです。逆に決めたが最後、人工知能の一人勝ちです。

このような創造性は、外部から勝手に評価基準を与えた、擬似的創造性に過ぎません。当事者にとっては何の意味もない。多くの人が投票によって「創造的」と考える作品は、それを制作した当事者にとって、創造的ではないのです。人工知能や自然知能は、だから、創造性を楽しむことができない。

天然知能だけが、「創造を楽しむ」ことができるのです。だからこそ、天然知能は、自分が自分らしくあることを、肯定できるのです。ちょっと説明しましょう。

創造とは、今までなかったものを創ることです。別にあなたはアーティストでもないだろうし、創造なんて、と思うかもしれませんが、しかし、ただ毎日生きるだけでも、創造です。今までなかったあなたが、一瞬ごと、時々刻々と、創られるわけですから。

あなたは、創るということに対して、アーティストを思い浮かべ、「何かを創るなんてことは、そういうイメージを持っているアーティストだけの仕事だろう」、と思ったかもしれませんが、しかし、アーティストの頭の中にイメージが存在するとき、それは既に存在するものになってしまいます。自分の内なるイメージを外に出して形にするだけなら、それは創造ではありません。なかったものを創るとは、自分の知らない向こう側からやってくることを待つしかないのです。

自分からは感じることもできない、自分の知らない向こう側、これを外部と言うことにします。創造とは、外部からやってくるものを受け容れること、なのです。アーティストがイメージするのは、外部からやってくるものが降臨する場所、やってくるきっかけに過ぎない。アーティストとは、平凡な私たちよりほんの少し、外部への感度がいだけで、創造についてやっていることは同じ、外部を受け容れること、なのです。

(郡司ベギオ幸夫「天然知能」講談社より)

※1 マメコガネ：コガネムシ科の昆虫。光沢のある緑色の体を持つ。

※2 出初式でぞめしき：日本の消防関係者によって、一月初旬に行われる仕事始めの行事。はしごに登り、ポーズをとる。

※3 いなせさ：男気があり、粋いきであり、心意気のあること。江戸における美意識のひとつ。

※4 博物学的、分類学的：ここでは「収集や分類をとおして事物の理解を深める学問のように」という意味。

※5 恣意的しじてき：気ままに自分勝手な様子。必然性のない様子。

問一 線①②のひらがなを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 線1「世界に対する」大別されるでしょう」について。

(1) ここで筆者の言う「人工知能」は、どのような「対処の仕方」をするでしょうか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 外部からの指令を忠実に実行する。

イ 自分にとって価値があるか否かによって行動を決める。

ウ 利害の有無にとらわれず柔軟に判断を下す。

エ あらゆるものを受け容れる。

(2) 次の A ～ D で、「自然知能」の例にあたるものには「1」を、「天然知能」の例にあたるものには「2」を、それぞれ解答欄に書きなさい。

- A 虫の名前を覚え、昆虫を採り、標本を作る。
- B 自作の動物図鑑を作る。
- C 道端の茂みから突如現れたマメコガネに興奮する。
- D 岩や石を拾い集め、鉱物の種類ごとに分ける。

問三 —— 線 2 「子供の頃、ドブ川で——天然知能でした」とあり

ますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大雨の翌日に迷い込んできた魚の水面に映る姿の一部をじっと見つめることで、その魚の種類を特定することに熱中していた、ということ。
- イ ひやかす大人の声も気にせず、必死に捕まえた魚を家に戻ってタライに移し、どのようにしようかと考えることができて嬉しかった、ということ。
- ウ 嵐によって流されてきた生き物たちを、食べるためではなく、流線形の背中を眺めるために掬い上げて、夢中で観察していた、ということ。
- エ 水面に見える種類も定かではない魚の影が、暗がりに見え隠れする様子を見て、魚の向こう側に感じられる未知の世界に興奮していた、ということ。

問四 —— 線 3 「出初式もその一つです」とありますが、「その」の指す内容は何ですか。簡潔に書きなさい。

問五 —— 線 「天然知能は、——知性なのです」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 天然知能とは、外部の価値判断に依存しながら、自分にとつての外部を受け容れ創造し続けることによって、自分が自分であることの証明を可能とするものである。
- イ 天然知能とは、一般的な評価や他者の意見に依存せずに、既に自分の中にある世界観を具現化することで、自らの存在を自ら認めることを可能とするものである。
- ウ 天然知能とは、未知のものとの接触から世界を広げ、刻一刻と変化していく自己を受け入れることによって、外部との差を認めることを可能とするものである。
- エ 天然知能とは、周りの目を気にせず、未知の世界をありのままに受け入れ、新たな自己をつくり上げてゆくことを可能とするものである。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現在は社会人となっている「私（＝もりの森野）」は高校時代のソフトボール部監督と駅前で偶然に会いコーヒーを飲みながら、一番思い出に残っている試合について話し合っている。その日の練習試合ではサードの「サキ」のエラーが重なり五回の時点で〇対一で負けていた。

続く打者を三者連続三振。その回の守備が終わっても、アネゴの投球に「ナイスピッチ」と声をかける人はいなかった。もう前にすら飛ばさせない。孤高のサークル※1からベンチへと引き上げてくるアネゴからは、そんな気迫を感じた。

「次から、私、行きます」

やってきたアネゴのグラブを受け取り、バットを渡しながら、私は囁ささやいた。

「いいよ。投げ切る」

先頭打者として打席に向かいかけたアネゴの腕を私はつかんだ。

「練習試合ですよ。今日は、ここまで。本番の県大会でやっちゃってください」

アネゴはちらりとベンチの方を見た。

「負けるわけにはいかない試合だ」

「監督のお父さんなら大丈夫です。もう死んでるらしいですから。た

ぶん文句も言いません。言ったとしたり聞こえません」  
「監督の親父おやじは関係ない」とアネゴは言った。「私が負けるわけにはいかないんだよ」

アネゴは打席に入り、一年生ピッチャーを睨にらみつけた。一年生に負けるわけにはいかない。アネゴの意地だろう。

その回、アネゴは塁に出たが、後続があっさりと断たれた。

六回、アネゴは簡単に先頭打者を打ち取ってから九番と一番に連打を浴びた。肩をかばうような仕草は微塵みじんもなかったが、球威の衰えは明らかだった。

「まだばてる球数でもないでしょうに」

監督が呟つぶやいた。

「私に行かせてください」

監督がちよつと驚いたように私を見た。

「珍しいわね。うちのクローザー※3が登板直訴じきせなんて」

クローザーが冗談であることくらい私にもわかった。私はただ、すでにゲームの勝敗が決まったあとで、アネゴを休ませるためだけに投げる控え投手だ。

「アネゴ、肩に違和感があるそうです」

監督の眉根まゆねが寄せられた。

「森野にそう言ったの？ いつ？」

「試合前です。今日は五回まで。六回、七回は任せると言われました」

監督はしばらく考え、首を振った。

「じゃ、事情が変わった」

確かにそうだろう。試合前、五回が終わったころには、悪くとも五

対○、あわよくば七対○、十対○だってあり得たはずの試合だった。

「試合の事情が変わっても、アネゴの事情は変わりません。球がいつてません。明らかにおかしいです」

快音が鳴った。グラウンドを見ると、高く上がった打球を懸命に追いかけたセンターがスライディングキヤッチしていた。これでツーアウト。

「負けたくないのは監督の勝手です。そんなものを生徒に背負わせないでください。お父さんの命日なんてそんなこと、私たちの知ったことじゃありません」

監督がきつとなって私を見た。何かを言いかけ、そしてまた首を振った。**ア**

「生徒になって背負わせてない。エースに背負わせただけよ」  
\*「詭弁です」

思わずかっとなった私の温度に合わせるように、監督の言葉の温度も上がった。

「詭弁でも何でも、それがエースなの」  
ストライク。

ヒがった主審の声に振り返ると、相手の三番を三振に仕留めたアネゴがゆっくりとこちらに歩いてくるところだった。

「勝つよ」

ベンチに戻ったアネゴが言った。

「もう一点もやらない。だからあと二点。死ぬ気で取って。お願い」

延長はなしと試合前に取り決めた。あと二回の攻撃で二点。勝つなら取るしかない。

言葉にこもっていたアネゴの気迫に、みんながしんとなった。

「取る。取るよ」

やがてキヤッチャーが言った。

「当たり前だよ。あんな一年坊にいつまでも舐められてたまるか」

「お姉様の怖さを教えてやんなきゃ」

「そう、そう。うちら、DSの集まりだしね」

いやん、私、Mよ、と誰かが言い、あんたが一番Sでしょうが、と笑い声が上がった。

「勝つよ」

アネゴの言葉に、おう、とみんなが応じた。

**イ**

相手の一年生エースはよく投げたと思う。いやらしく粘られて四球を選ばれても、セイフティバントで揺さぶられても、崩れることなく自分の投球を続けた。

一点を返して同点。なお一、三塁。荒いプレーの一つでもあれば、もう一点入っていてもおかしくなかった。そうさせないのは、一年生エースの気合いの入った投球のせいだろう。投球につられて、野手たちが堅い守りを見せていた。もう一つ取れたかもしれない先の塁が取れない。**ウ**

粘られながらも、次の打者を三振に取り、一年生エースがガッツポーズをした。

「まずいね」

奈美が呟き、私は、うん、と頷いた。**エ** 一気に畳みかけておきた

い場面だった。

エラーを繰り返したサードのサキ先輩が打席に入った。



相手のキャッチャーはきわどい球を二球続けて要求した。きわどかったが、ストライクを取りに行く気がないのは見ていてわかった。一点勝負。二塁はあいている。歩かせるつもりだろう。一つアウトを取れた今、塁を埋めてあわよくばゲッツ<sup>※5</sup>。悪くともバックホームでフォースアウト。もう相手がただの練習試合などと考えていないのは明らかだった。最初は力試しのつもりだっただろう。けれど、勝てば、その自信はチームにとって何物にも代え難い財産になる。相手は本気で勝ちにきていた。

一度、打席を外したサキ先輩がふうと長く息を吐いて、グリップを握り直した。

「届かない距離じゃないわよ」

私の隣で監督が呟いた。

「決めちゃいなさい」

相手が投げた三球目。その手からボールが離れたとき、ピッチャーの顔が小さく歪むのがわかった。大きく外へ外すはずのボールが、何でもないストリートとしてホームベース上にすっと投げ込まれた。

「今年はともかく、来年は怖いわね」

監督が苦笑しながら呟いたとき、ファーストの頭上を鋭く抜けたライナーはフェアグラウンドに落ち、追いかけてくるライトを避けるようにファールグラウンドに転がっていた。

「あのピッチャー、まだまだ伸びそう」

三塁ランナーはボールの行方を確認してから、ゆっくりホームを駆け抜け、一塁ランナーも余裕を持ってホームに滑り込んだ。生還した二人のランナーが手をパチンと合わせ、おーと拳を突き上げて大きく

叫んだ。二塁上の打者に向けて、おどけたガッツポーズを送る。

「サキ先輩、泣いてる？」

私の隣で奈美が呟いた。塁上を見ると、おどけたガッツポーズに、それ以上のふざけたガッツポーズを返していた先輩の日は光っているように見えた。お尻を突き出したポーズを解いたサキ先輩は、やがて次の打者に向けて、小さく頷いた。それに頷き返したアネゴが、帽子のつばに手を当てる、軽く頭を下げた。何だろう、と私は思った。打席に入りながらやれば、通常の、打席に入る際の意味のない挨拶になるだろう。が、打席に入る前に、自軍のベンチの端に向かってやる意味がわからなかった。つられて目線で追ったが、そこには誰もいなかった。逆転劇の直後の興奮で、誰もアネゴの仕草に気づいてはいないようだった。視線を戻すと、すでにアネゴは打席に入っていた。相手ピッチャーに向ける凛とした視線とは裏腹に、その頬が少し緩んでいる気がした。

「はい。ヒョッコの二、二年生諸君。よく見ておいて。あれがうちのエース」と監督が言った。<sup>4</sup>「うちのエースにして、うちのキャプテン。ああいう、いい女にならなさい」

動揺したわけではないだろう。ギアの上がったうちのチームとの力の違いを見せつけられ、最後に頼ったのが自分の渾身の力だったということだ。コースを狙わず、力任せに放たれたストリート。アネゴの体が力みなく動いた。すつと空間を切り裂いた鮮やかな軌跡が、ボールを高々と青空に飛ばした。センターは一歩だけ後ろに下がり、すぐに諦めた。

ホームランゾーンとして設置されたフェンスの上をボールは軽々と

越えていった。

「まったくねえ」

ベースを一周したアネゴが、本塁のところまで、二塁ランナーだったサキ先輩とハイタッチをかわしていた。

「今年はともかく、来年は怖いわね。頼むわよ、ヒョッコちゃんたち」  
明らかに球威は衰えたものの、アネゴがコントロールを乱すことはなかった。ラストイニングの七回、緩い球を効果的に使い、二つのアウトを重ねた。

最後の打者もツーストライク。遊び球はなかった。三球目。力強く振り抜いたバットはただ空を切った。乾いた音を立ててミットにボールを収めたキャッチャーが、バッターアウトの主審の声に押し出されるように、アネゴに向かって駆け出した。飛びついてきたキャッチャーを抱き止め、よっしゃーとアネゴは拳を突き上げた。

よっしゃー。

サークルの中に集まった他の八つの拳が、それに続いて空を突き上げた。

先にグラブを差したバットを肩に担ぎ、小学生の男の子が駅前の広場を駆けていった。

「あるときはすみませんでした」と私は頭を下げた。

「何のこと？」

監督は私に聞き返した。

「何も知らないで、生意気なこと言いました」

「知ったこっちゃないです、って？」

「あ、覚えてましたか」

「うん。覚えてた。すっかりと」

私たちは目を合わせて、ちよつとだけ笑った。

あとで知った話だ。

あの日、命日だったのは、監督の父親ではなく、サキ先輩の父親だった。

もともとサキ先輩がソフトボールを始めたのは野球好きの父親の影響だったという。サキ先輩がまだレギュラーではなかった一年生のときから、父親は必ず試合を見に来てくれていたらしい。上の学年の人たちは、だから、みんなサキ先輩の父親のことを知っていた。

「最初はどこの酔っぱらいかと思つたよ。サキも何にも言わないし。まあ、恥ずかしかったんだろうけどさ」

およそ高校女子ソフトの応援には相応しくないだみ声で、それでも野次は一切なしで懸命に応援してくれるその姿は、いつしかうちの部の試合にはなくてはならない名物になっていった。

「先輩たちなんかさ、親父さんの姿がないのを見て、その日、サキが休みだつて気づくぐらいだった。まあ、もつとも」とアネゴは苦笑しながら教えてくれた。「その後、一人で現れたけどね。風邪を引いた娘は家で寝ているのに、その親父だけ、応援にやってきた。娘の分までつてんで、気張つたんだろうね。いつもよりいっそう、熱の入った応援でさ。その日は、負けた試合を、たまたま親父さん登場の直後の回に逆転しちゃった。で、誰からともなく言い出した。そーいや、一年のサキのお父さんが応援にくると、必ず試合に勝つてたんじゃなかったっけって。それで、サキの親父不敗伝説なんてのができちゃっ

た。実際には、そんなことないんだよ。だって、毎試合、見に来てるんだから。だったら、うちのチーム、不敗かよって話さ」

その親父さんがぼったりと応援にこなくなったのは、年が明けようとするころだった。

ちよつと病気で……。

サキ先輩はそう説明した。

「サキも知らされていなかったらしい。それほど深刻なものだとはね」  
親父さんが亡くなったのは、先輩たちが二年に上がって、すぐのことだった。

「それをね、忘れたんだよ」

アネゴは苦しそうに言った。

「あれほど一生懸命応援してくれたサキの親父さんの命日を、私たちは、誰一人覚えてなかった。みんなでお葬式にも出たのに。みんな、あんなに泣いたのに。誰も覚えてなかった」

友人の父親の命日。葬儀に出たのなら季節くらいは覚えているだろうが、正確な日付まで覚えているというのは、むしろ稀なケースだろう。忘れた先輩たちに非があるとは思えなかった。

葬儀屋の娘としての意見を言わせてもらおうなら。

頭にそう付け足して私がそのことを言うと、アネゴは微笑んだ。

「そうだね。そうかもしれない」

「それでも自分を責めるんですか？」

私はそう聞いた。

「責めちゃいない。ただ情けないだけ」

アネゴはそう答えた。

「誰もわかってなかったんだ。あの日、サキが試合にきた意味を。命日なんだから、きつと法事だ<sup>※7</sup>ってあったはずなんだ。でも、サキは試合を優先した。ただの練習試合でも、親父さんが喜ぶのは自分がそっちに出ることだって思ったから、だからサキはやってきた。私たちはその思いをちゃんと受け止めてやらなきゃいけなかった。チームメイトなんだから。友達なんだから。でも、誰も気づきすらしなかった。監督以外は誰もね」

今日は私の父の命日だから。

監督はそう言って、先輩たちに気づかせようとした。そして、ようやくアネゴは気づいた。

「アネゴだけだったんですか？」

私の口調はわずかにそれを責めるものになった。

「ああ見えて、結構、みんな素直だから。そう言われれば、そのまんま受け取っちゃう。中には、そう言えばサキの親父さんが亡くなったのも、去年のこの頃じゃなかったっけと思っただ人はいたらうけどね」  
アネゴの口調は誰も責めていなかった。

〔短編学校〕集英社 所収 本田孝好「エースナンバー」より

※1 サークル：ソフトボールのピッチャーが投球する場所に書いてある円。

※2 監督のお父さんならく：試合開始直前に監督は笑いながら、「今日は私の父の命日(亡くなった日)だから絶対勝つてよね」と選手に声をかけた。

※3 クローザー：最終局面に登場し、試合を締めくくる切り札的な投手。ソフトボールは七回で試合終了となる。

※4 詭弁<sup>きべん</sup>：理屈に合わない事をこじつけること。

※5 ゲッツー：攻撃側のチームからアウトを取る戦術的方法の一つ。後に出てくる「フォースアウト」も同じ。

※6 だみ声：にごった感じの声。

※7 法事：死者を祈るために行う仏事。

問一 次の文は、本文の「ア」「エ」のどこに入りますか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ギアが一つ、上がった。

問二 線1「監督はしばらく考え、首を振った」とありますが、

この時の「監督」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 肩を痛めているというアネゴが、サキのミスを帳消しにするため頑張っているので、このまま様子を見ようと思った。

イ 自分が「絶対、勝つてよね」といったために、アネゴが無理をしているので、怪我をしないうちに交代させようと思った。

ウ どうしても勝ちたいので、最後までアネゴに投げさせたいが、本人の希望通り次の回で交代させようと思った。

エ 肩の調子が悪いことを知ったが、アネゴはサキの事情を理解して投げているとわかり、そちらを優先しようと思った。

問三 線2「試合の事情が〜変わりません」とありますが、

この時の「私」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相手が予想外に手ごわいからといって、急に試合前の計画を変えたりせずこの回でピッチャーを交代させてほしい。

イ 予想外に苦戦しているからといって、個人的な理由で、肩の調子が悪いアネゴにこれ以上無理をさせないでほしい。

ウ アネゴは肩を痛めながらも一年生に負けたくないと思地になつていますが、大事を取って交代させてほしい。

エ アネゴはサキのために投げているが、五回で交代するつもりだったので初めの予定どおり交代させてほしい。

問四 線3「それがエースなの」とありますが、この時の「監督」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アネゴの肩の調子を心配して交代を要求する私の言葉にも一理あるとは思いつつも、父の命日でもあり県大会前の練習試合でもあるので、信頼のおけるアネゴにかけてみることにした。

イ 個人的な理由で絶対に勝つてよねと言ったことで、アネゴに無理をさせていることを反省しながらも、こういうピンチを乗り越えて、真のエースになってほしいと思交代しないことにした。

ウ 試合前の自分の言葉のせいで、調子の悪いアネゴに多くのプレッシャーをかけたことを理解しながらも、チームメイトの思いを背負うことのできる存在として、アネゴを信じて任せることにした。

エ アネゴが肩の不調について自分に何も相談してくれなかったことが残念であったが、ずっとエースピッチャーとして投げ続けてきたアネゴの経験と力量を信じて、このまま続投させることにした。

問五 —— 線4「うちのエースにして〳〵なりなさい」とありますが、この言葉に込められた「監督」の思いの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ピッチャーで四番バッターも務めるといふ非凡な才能を持つているだけでなく、ピッチの時でも強い言葉でみんなを励ます、精神力の強さも兼ね備えた人間になってほしい。

イ 肩の調子が悪くても相手打線を抑えられる優れたピッチャーであるというだけではなく、劣勢の試合中でも穏やかな表情で打席に立つ、平常心を持っている人間になってほしい。

ウ ささいな仕事でも相手に圧力をかけられる大きな存在であるだけでなく、エラーをした仲間に挽回するチャンスを与えることも忘れない思いやりのある人間になってほしい。

エ 選手としてチームを勝利に導く力量があるだけではなく、みんなのさまざまな思いを背負いながら責任を引き受けることができる、器の大きな人間になってほしい。

問六 —— 線5「私の口調は〳〵ものになった」・6「アネゴの口調は〳〵いなかった」とありますが、この時の「私」と「アネゴ」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私は、葬儀屋の娘としての経験から友人の父の命日を覚えていないのが普通だと思っていた。一方アネゴは、自分自身の活躍で試合には勝利できたが、仲間であるサキの父の命日だけは覚えておかなくてはいけなかったと自分のことしか責めていなかった。

イ 私は、命日を忘れるのは仕方ないと言いつつも他の先輩たちをつい責めてしまった。一方アネゴは、自分を情けないと言いつつも、友達としてエースとしてやるべきことをやり、チームメイトも一丸となって勝利したのだから誰を責める気持ちもなかった。

ウ 私は、監督の言葉を聞いても気づかずに結果としてアネゴ一人に多くのものを背負わせてしまった他の先輩たちを責めた。一方アネゴは、監督の言い方では気が付かない仲間たちの素直さを思い自分があの時はつきりと言うべきであったと自分を責めていた。

エ 私は、チームメイトの父親の命日に関する事ならば葬儀屋の娘である自分がまず気づくべきであったと後悔した。一方アネゴは、調子が悪いながらも自分自身で活躍することが出来、さらにみんなで協力して試合に勝ったのだから誰も責めなかった。

問七 —— 線「決めちゃいなさい」とありますが、この時の「監督」の気持ちを分かりやすく説明しなさい。

# 三

問題文〈甲〉・〈乙〉を読んで、後の問いに答えなさい。  
 なお、問題文〈乙〉については設問の都合上、送り仮名  
 や返り点を省略した部分があります。

## 〔甲〕

楚の襄王、晋の国をうたむとす。孫叔敖、これをいさめ申していは  
 く、「園の榆の上に、蟬、露を飲まむとす。うしろに蟪蛄をかさむ  
 とするを知らず。蟪蛄、また蟬をのみまもりて、うしろに黄雀をか  
 さむとするを知らず。黄雀、また蟪蛄をのみまもりて、榆のもとに弓  
 を引いて、童子をかさむとするを知らず。童子、また黄雀をのみま  
 もりて、前に深き谷、後に堀株のあることを知らずして、身をあやま  
 たり。これみな、Xをのみ思ひて、後害をかへりみざるゆゑ  
 なり」と申せり。王、この時、悟りを開きて、晋を攻むといふこと、  
 とどまりたまひぬ。

## 〔乙〕

〔十訓抄〕第六 忠正を存すべき事

「園中有樹。其上有蟬。蟬高居悲鳴。飲露。  
 不知螳螂在其後也。螳螂委身曲附。欲  
 取蟬。而不知黄雀在其傍也。黄雀延頸。  
 欲啄螳螂。不知知彈丸在其下也。此三者、  
 皆務欲得其前利。而不顧其後之有患  
 也。」

〔説苑〕

※1 孫叔敖：楚の襄王の家臣。

※2 榆：木の種類。

※3 蟪蛄：かまきり。問題文〈乙〉の「螳螂」も同じ。

※4 黄雀：雀の一種。

問一

線1「いさめ」とありますが、その漢字表記と意味の組  
 み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えな  
 さい。

- ア 勇め（後押しをする）
- イ 諫め（意見する）
- ウ 諍め（言い合いになる）
- エ 諷め（非難する）

問二

線2「まもりて」とありますが、本文における意味とし  
 て最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 保護して
- イ 見つめて
- ウ 逃がして
- エ 攻撃して

問三

Xに入る言葉として最も適当なものを問題文〈乙〉の  
 中から探し、抜き出しなさい。

問四 —— 線3 「此 三者」とありますが、何を指しますか。その組み合わせとして正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 樹・蟬・露

イ 螳螂・黄雀・彈丸

ウ 蟬・螳螂・黄雀

エ 樹・露・彈丸

問五 —— 線4 「不 顧 其 後 之 有 患 也」は、「其の後の患へ有るを顧みざるなり」と訓読します。これを参考にして、解答欄に返り点をつけなさい。なお、送り仮名は不要です。

問六 問題文〈甲〉の話の内容として正しいものには「1」を、そうでないものには「2」を、それぞれ解答欄に書きなさい。

A 襄王は晋の国を攻めるつもりでいた。

B 孫叔敖は襄王に幼少期の体験談を話した。

C 童子は命と引き換えに黄雀を守りぬいた。

D 襄王は孫叔敖によって自らの短慮に気づかされた。





【国語】

解答用紙 (高校第一回)

受験番号

氏名

得点

—

問一

—

あ

覆  
われ

い

じまん

う

てんけい

え

じく

お

刷新

問二

—

(1)

—

(2)

A

—

B

—

C

—

D

—

問三

—

—

問四

—

—

問五

—

—

問一

—

—

問二

—

—

問三

—

—

—


—

—

—

問四   
問五   
問六

問七

  
問一   
問二

問三   
問四

問五   
不顧其後之有患也

問六 A   
B   
C   
D